

## 能 鷺

### あらすじ

延喜帝（醍醐天皇）、ある夏、京都・神泉苑（皇室の庭園）で、夕涼みの宴を催しました。池の洲崎には白い鷺が舞い遊び、曲水の宴の盃のように見える夕月の影が、地水に映っています。帝はじめ、参加した臣下、官人たちは皆、その美景を楽しんでいました。

ふと帝は、興味を覚えられたご様子で、臣下の蔵人に鷺を捕らえるよう命じられました。蔵人は翼のある鳥だけに、どうしたらよいかわからず躊躇っていましたが、帝の御威光を頼りにして、心を定め、岩陰から忍び寄って捕えようとしたのですが、鷺は驚いて飛び立ちました。そこで、蔵人が鷺に、勅諭に従うようにと語ると、元の場所へ降り、羽を垂れて地に伏し、おとなしく捕らえられました。

その場の人々は帝のご威徳だと称賛し、帝も大層お喜びになって、鷺にも蔵人にも五位の爵位を授けられました。

鷺は優雅にあたりを舞い飛んだ後、帝の命により、放されました。すると鷺は嬉しそうに飛び上がり、どこへともなく去っていきました。

### みどころ

「鷺」は曲自体短く、ストーリーも至ってシンプルですが、登場人物も多く、大習、重習として能の演目の中でも大切にされてきた大曲です。曲中の、鷺が帝から五位の位階を賜るエピソードは、五位鷺の名の由来になっているといえます。

能に出てくる動物は、この鷺、鶴亀で出てくる鶴や亀、小鍛冶の狐、などおめでたいまたは神聖なものとして扱われます。

「鷺」のシテ（鷺役）は通常、目安として元服前の子どもか、還暦以降の老人のみが勤めることを許されています。子どもと老人に限られるのは、世俗の色の薄い、神の領域に近いからだと言われます。「鷺」ではシテの清浄な神聖さが尊ばれるのです。シテは面をかけずに直面で舞います。

### 舞 鷺乱

鳥だけに、シテの言葉はほとんどなく、舞が主体になります。特殊な型を含む「鷺乱（さぎみだれ）」が舞われますが、飛ぶ様子や、ぬかるみを抜き足で歩く姿などを見せて、舞い遊ぶ鷺の優雅な美しさを表し、この曲の大きな見どころになっています。

鷺を現す鷺冠も、装束もすべて白が基調で、清浄な印象が作り出されます。「鷺」が舞われる機会はそう多くありません。清々しく、爽快な舞台をお楽しみください。